
Lovers ～運命の二人～

紫雲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

L o v e r s 　 ￣ 運命の二人 ￣

【Nコード】

N 5 3 2 7 X

【作者名】

紫雲

【あらすじ】

偶然に出逢った二人。

緒方純恋と中村涼。出逢った瞬間に恋に落ちた二人。

そんな二人には偶然とは思えないような繋がりがあった。出逢うべくして出逢った二人のlove story。

第一章『出逢い』

♪ prologue

出逢いには2種類の出逢いがある。

偶然の出逢い、そして、運命でさだめられた出逢い。

もちろんどっちが良いとか、どっちが素敵とか言うことはない。

偶然に出逢った二人、運命に引き寄せられた出逢い。

どちらにも素敵な出逢いはあるものだ。

でも、男女の出逢いになると話は違う。

赤い糸とか、運命の人との出逢いとか言った方が素敵に聞こえるし、偶然が運命だって感じる事もある。

もちろん、僕だってそんな運命の出逢いに憧れてはいた。

そしてあの冬、彼女と出逢う事で僕に運命を感じさせてくれた。

僕と彼女が出逢ったのは、僕が18歳、彼女21歳、その年の秋から冬へ向かう少しずつ寒さが身に染みるようになってきた季節だった。

それはまるで天使との出逢いのように、そして運命的な出逢いだった。

そんな素敵な出逢いを経験した僕は、一瞬で天使のような彼女に恋をしてしまった。

そして、彼女も、きっと僕と同じ気持ちだったと思う。

お互いの運命に感謝し、出逢いに感謝し、惹かれ合った。

そんな二人の恋は、彼女と僕の恋はその瞬間から始まった…。

第一話 落し物

僕は休講になった2限目の時間をつぶそうと大学の図書館に向かった。

図書館には、別に勉強をするとか、本を読むわけではないが、あの空間のあの空気が好きで足を運ぶ事がよくある。僕の隠れ家と言う感じだ。

その日は朝から雨が降っていたからか、図書館はいつもよりも人が少なく、いつも以上に静かな感じがした。

図書館に入り、最初に瞳に映ったのは、その静かな空間の窓際の席に座り、窓の外の雨をぼんやりと、まるで雨粒を数えているかのように窓の外を眺めている女性だった。

とても綺麗な女性だった。そして何より淋しそうな横顔だった。そんな彼女の頬から一粒の涙が零れるのを偶然見てしまった時には、なにかが僕の心をくすぐり、心が揺れるのを感じた気がした。

自分でも不思議に思うが、初めて見かけた女性にここまで心を奪われるとは・・・

と言う感じだった。きっと、この図書館の中で、彼女の涙に気づいたのは僕だけだったと思う。

彼女の涙の訳はわからなかったが、女性の涙を、あんな哀しそうな涙を、僕だけが気づいた。

そう思うだけで、心が痛んだ。

彼女は大きく深呼吸をして上を向いてから立ち上がり、零れる涙を堪えながら図書館を後に行ってしまった。僕は声をかけようかどうか迷った。

でも結局、彼女の後姿を見送ってしまった。

彼女が図書館を去った後、僕は彼女が眺めていたものと同じものを見て、彼女を少しでも感じたいと言う衝動に駆られその場所に座りたくなり、さつき彼女が座っていたところまで歩きかけた。

そして、その瞬間そこに落ちていた物に気づいた……。

彼女の落し物は学生証だった。『教育学部4年 緒方純恋^{おがたすみれ}』。

純恋……美しい彼女にはふさわしい名前だ。

僕は教育学部の2号館に行き彼女を探がし、直接それを手渡そうかとも思ったが、

学生課へ行き届けることにした。

学生課で落し物を届けると、僕の学部と名前、連絡先を聞かれ、所定の用紙に書いた。

『経済学部1年 中村涼^{なかむらいりょう}』と書き、連絡先？

と、迷ったが携帯電話の番号を付け加えた。

彼女から電話がくるわけなんてないよな、と思ったが……。

次の日の午後、講義も終わり何気なくキャンパスを図書館の方へ歩いてみると、

携帯が鳴った。登録した相手からの電話ではなかったが、どこか見覚えのある番号からだったので迷ったが出てみることにした。

電話の向こうから聞きなれない女性の声で

「もしもし、中村さんの携帯ですか？」

僕が「はい、そうですが」と返事をする、

その女性は「私、緒方と申します。昨日学生証を拾って頂いた中村さんですよ。」

ありがとうございました。できれば直接お会いしてお礼をしたいのですが……。」

昨日の図書館の彼女からの電話だった。

「は、はい……いえ大丈夫です。」何が大丈夫なんだかわかん

いけど僕はそう答えていた。

「じゃ、今どこ？キャンパスですか？これから予定はありますか？」と彼女が続けたので、

「はい、今大学にいます。今日の講義も終わりましたし、今からはフリーですけど・・・」

と僕は答えた。

すると彼女は、大学の近くの喫茶店を指定し「じゃ4時半にそこでお逢いできませんか？」

と続けて言ったので、

僕は「はい、わかりました。」と言って電話を切った。

今日の彼女は、昨日の涙の彼女と同一人物なのか？と思うくらいに明るく、活動的な印象だった。

だから、彼女のペースで会う約束までしてしまったのだ。

時計を見ると4時少し前だった。（あと30分か・・・）

第二話 ♪ 恋の予感

4時20分に僕は約束の場所に着いた。すると彼女はもうすでに奥のテーブルに腰掛け、

窓の外を、あの時と同じようにぼんやり眺めていた。

その姿は、やっぱり昨日と同じようになんとなく淋しげな美しさだった。

「お待ちせしてすみません」僕がそう言っただけで、にっこり笑って

「私も今来たところよ。どうぞ・・・。」と優しく席へ誘ってくれた。

確かに今来たばかりなのだろう、テーブルの上には水の入ったグラスが一つあるだけだった。

僕が彼女の向かいの席に座ると、「昨日はありがとうございました。」

と、なんだか恥らった笑顔を僕に向けてくれた。さっきまで淋しそうだった彼女の顔が、

その時はなぜだか、なんとなくだが恥らったように笑ったように見えた。

店員が水の入ったグラスをひとつ持って、オーダーを取りに来ると、彼女もまだ何も注文していなかったらしく、ミルクティーを注文した。初めて会ったに近いのだが、なんとなく彼女らしいと思ったのは彼女の美しい顔立ちと、それに似合った服装からだ。僕はいつもと同じくコーヒーをオーダーした。

この店のブレンドコーヒーはなかなか美味く僕好みなのだ。

「そう言えば自己紹介がまだだったわね。私、教育学部4年、緒方純恋すみれって言います。」

昨日は学生証拾って頂きありがとうございました。」

「あつ、僕は経済学部1年、中村涼です。」ときこちない自己紹介をした後、

「1年生ですよ？18歳？19歳？」

「はい、まだ18歳です。」

「そっか、じゃ私が3つお姉さんだね。うーん、そしたら涼くん。って呼んでもいいかな？」

「は、はい・・・かまいませんけど。」

いくら年上でも、初対面でくん？と思いながらも、まったく嫌な気はしなかったし、

どちらかと言うと、なぜだかなんかすぐつたいような、照れるような変な感じだったが、

正直言うところホントは嬉しかった。

そして次の彼女の言葉に、僕は更なる心の動揺を隠すのが精一杯だった。

「涼くん、私すごくびっくりしちゃったんだけど、私と涼くんの携帯の番号さあ、

下4桁おんなじなんだよね。って言うか正確には頭3桁も同じだから、

ほとんど一緒だよな。

もうびっくりしちゃって、こんな偶然ってあるんだねえ。すっごいと思わない？」

「・・・えっ、そ、そうなんですか？全然気づかなかったです。」

そっか、だからあの時、どこかで見た事ある番号だと思ったんだ。どこかで見た事あるどころか、自分の番号に似ていたなんて、全く気づかなかった・・・。

「そうよ、学生課であなたの電話番号聞いた時に、びっくりしちゃって、

と言うか感激しちゃって、思わずすぐに電話しちゃったのよ。きつ

とこれって運命よね。

運命の出逢い。なんちゃって。」

僕は、その一言に、『運命』と言う言葉にドキッとして「そうですね。」

と答えるのがやっとだった。

それから、たわいもない話を小一時間ほどして、彼女がこれから家庭教師のバイトだと言うので店を出た。

そして別れ際に、また会おうと言う約束を交わしその日は別れた。

彼女が僕に言った一言「またね。」を信じて彼女の後姿を見送った。

僕はその時、心の奥に芽生えた想いに気づきはじめていた。

第三話 ♪ 涙の訳

あの日に彼女が別れ際に言った、『またね。』を僕はどこかで信じていた。

でも、あの日からもう1週間が過ぎ、月も変わり、街並みはすっかりクリスマスモードに突入していた。

この1週間、僕から電話をかけようかとなんと携帯を手にしただろう？

でも結局しなかった。いや、正確にはできなかった。

彼女のあの涙のわけが気になってしまい電話をかけることが出来なかったのだ。

その日僕は、クリスマス一色の街の中で彼女を見かけた。

カフェの中へ男と一緒に入っていく彼女を偶然にも見かけてしまった。

その時僕は、迷わずそのカフェの中へ二人を追って中へ入り、2人の様子が窺える席に座った。

気づかれないように少し離れた席に座ったので、2人の話している声は聞こえなかった。でも、今にも泣きだしそうな彼女と、その前に座る男の表情から、楽しい話でないことはこの距離でもわかった。そんな想像していた時、彼の声が店内に響いた。

「わかったよ。もうめんどくせー女だな。」

そう言うと、男は店から出て行ってしまった。

残された彼女は、ぎゅっと口を噤んで、上を向いて零れそうな涙を堪え、一つ大きな深呼吸をして、店員や周りの客に申し訳なさそうにちょこんと頭を下げ、店を出て行くこうとしていた。

僕は声をかけて良いものかどうか迷った。ほんの一瞬だったがホントに迷った。

でも、迷った末に店を出た彼女に声をかけた。

「純恋さん。」と出来るだけ自然と、そして優しく。

彼女は瞳に大粒の涙を瞳に抱え、今にも泣きだしそうな顔で振り向いた。

その姿を見て、僕は心の中で一瞬、ほんの一瞬、抱きしめてあげたいと思った。

なんて、切ない表情なのだろう。そして、なんて美しいのだろう。

僕はそんな彼女に見とれてしまっていた。

「涼くん……。」彼女の涙声で我にかえり、言葉を探していた。

「こんにちわ。」

僕は、彼女の涙の訳を知らないふりして、少し笑顔で挨拶をした。純恋さんは慌てて顔を上向きにし、涙を抑え、精一杯の笑顔で僕に話しかけてくれた。

「涼くん、こんな所で偶然ね。お買いもの？」

「あ……、はい。妹へのクリスマスプレゼントを見に来たんです。」

僕は、まさか、二人のあとを付いて来たとも言えず、焦って理由をこじつけた。

「そっか、もうすぐクリスマスか……。」

そう言うのと、なんだかまた少し寂しそうな表情を浮かべたのが気になったが、

「そうなんだ。妹想いのお兄さんね。」で？決まったの？プレゼント。」

と何事もなかったように彼女は話した。

だから、僕も「いえ……まだ……です。」と答えるだけにした。

「じゃ、一緒に見てあげる。」行こう。」と、僕の手を取り、最高の笑顔を僕にくれた。

僕はというと照れくさいのと、突然の展開に驚いて、顔が真っ赤になるのを彼女に見られたくなくて、僕の手を引く彼女の顔を見るこ

とができなかった。

更に、僕の胸のドキドキが彼女に聞こえてしまうのではないかと気が気じゃなかった。

それでも、僕は彼女の手をしっかりと握り返していた。

手を繋いで、街を歩くなんて事は初めての経験でもないはずなのに、この胸のときめきは？このドキドキ感は何なんだろう？まるで恋をしてるみたいだった。

そうだ、僕は恋をしてるんだ。それも今までの恋とは比べ物にならないくらいな恋をしてるみたいになんか舞い上がっていた。

「どんな感じ？歳はいくつ？」

「えっ？なにがですか？」

「妹さんよ。妹さんはいくつ？どんな感じの女の子なの？」

「あつ、妹ですね…。えーと中3で14歳、もう生意気で。どんな感じって言うと・・・、

そうだなーあ、今ドキの、そうそう雑誌から抜け出てきたって感じかな。」

そんな事はどうでもよかった。妹の事より、純恋さんの事を知りたかったし、この2人の時間を大切にしたいかった。

でも、純恋さんは、そんなことはお構いなしに、「そっか、中学3年生か・・・、じゃあ、お財布とか、コスメポーチとかはどう？アクセサリーはお兄ちゃんからよりも、彼氏からもらった方がうれしだいだろうし・・・うふ。」

なんて言いながら、彼女は、さっきまでとは違う笑顔を浮かべていた。

僕といるのが楽しいというより、プレゼント選びが楽しいって言う感じだったが、それでも僕は彼女が笑顔に戻ってくれて嬉しかった。そして、プレゼントはと言うと、結局、コスメポーチを妹のクリスマスプレゼントとして買う羽目になってしまった。

「今日はありがとうございました。おかげでセンスのいいプレゼントが買えました。」

今年は妹に、お兄ちゃんセンスないなんて言われなくてすみそうです。」

「そう？喜んでもらえてよかったわ。こちらこそ、楽しい時間をありがとう。」

「あの……。」このまま別れたくない僕は、思い切って

「よかったら、これから夕食でも一緒に行きませんか？今日のお礼をさせてください。」

本当に思いきって言ってみた。これぞ、清水の舞台からって感じだった。

「ごめんね、今夜は家庭教師のバイトなの、でも、もう少し時間はあるからお茶でもしよつか。よかったらだけど。」

「は、はい。じゃお茶にしましょう。」と答えながら、よかったまだ今日は終わらない、そう思った。

そうして、二人は、角を曲がったところにあったカフェに入りそのテラスで小一時間話をした。

その話の中で、また彼女と僕の間の運命の扉をノックした。

第四話 ♪ 運命の1224

「ごめんなさい。本当は昼間、純恋さんに声をかける前…、見てしまったんです。」

いや、正確には、あなたを見かけて、あのカフェの中まで追いかけて行ってしまったんです。無意識にだったけど・・・。」

「そうじゃないかと思ってたわ。私が振り返った時のあなたの顔みたらピンときちゃったわよ。あつ、見られてた。ってね。」

「ごめんなさい・・・。」

まさか、彼女が知っていて、僕にショッピングまで付き合つて、更に、こうしてお茶まで付き合ってくれるなんて・・・。なぜだかさっぱりわからなかった。

「いいのよ。あの時に知らないふりしてくれてよかった。」

だから今こうして涼くんとお話しできてるんだしね。

もしあの時、あなたがどうしたんですか？なにがあったんですか？なんて聞いてきてたら、私きつと、なんでもないわ、じゃあね。つてあの場から逃げてたでしょうね。

そうなっていたら、今のこの時間は存在しないのよ。だから、あなたに感謝してる。」

彼女の言った意味を必死に考えてみた。

『今のこの時間は存在しないのよ。あなたに感謝してる』って今の時間があつて良かったって事？僕と話が出来て良かったって事？そう思った瞬間に、なんか胸のあたりが、きゅーって締め付けられる感じがした。

「あの、ひとつ聞いてもいいですか？」僕は、昼間会った時からずっと、聞こうかどうしようかと、迷っていた事があった。

「なあゝに？いいけど。」

「純恋さん、クリスマスになにか思い入れがあるんですか？」

「どうして？」

「昼間、僕がクリスマスプレゼントを買いに来たって言った時に、『クリスマスか……。』ってとっても寂しそうに言ってたから。」

「そっか、寂しそうだったか……。まいったな。キミってさ不思議だね。直球なのに、なんかあったかいんだよね。」

「あつ、ごめんなさい。忘れてください。なんか変なこと聞いてすみませんでした。」

「うっうん、いいよ。クリスマス……。そうね、思い入れがあるって言えばあるわね。さっきの男の人ね、一応彼氏だったの。って思ってたのは私だけかもなんだけどね。」

で、今日は別れ話ってわけ。」

そこまで言うって純恋さんは、ふーっと大きく息を吐いてから、
「彼にね、今年のクリスマスは一緒に祝いしようって言われてたのね。」

でも、今年はもう、彼に『おめでとう』って言うってお祝いしてもらえないって思ったら、なんか寂しいって言うかなんか寂しくなっちゃったのね。」

「そうですか、おめでとうって祝ってもらえないと思ったんですかえ、ってお祝いってクリスマスなのにおめでとうって……。」

「うん。私の誕生日12月24日なの」

その言葉を聞いた瞬間だった、僕と彼女の運命の扉がまた一つ開いた気がした。

「えっ、それってマジですか？」

「ほんとよ、嘘なんかついてもしようがないでしょ。」

そうだよな、嘘なんてついても仕方ないよな。でも、こんなことって……。あるのかな？

「実は、僕も12月24日生まれなんです。」

「うっそ、ホントに？それって、またまた偶然の一致じゃない。っていうかこれってやっぱり私たち出逢うべくして出逢ったんじゃない」

ない？

すっごいよね、ね、涼くん。」

「は、はい、びっくりです。」

僕はその一言を答えるのが精一杯だった。

「そっか、じゃあさ、今年のXmas eveは2人で祝いしない？

ねっ、そうしましょ。いいよね。」

「え、ええ。」

「あっ、ごめん・・・、Eveだもんね。予定あるよね。彼女とかいるんですよ。」

「いいいです。全然いいです。だから大丈夫です。」

僕は、必死に彼女がいない事をアピールしていた。

「うふふ、涼くんって可愛い。」そう言っていると彼女は、思いつきり素敵な笑顔で、

「じゃ、約束ね。今年のXmas eveは私におめでとっって言っ
つてね。

私もあなたにおめでとっって言っから・・・。」

それからしばらくして、純恋さんのバイトの時間が迫ってきたので僕たちは店を出てた。

「じゃ、またね。」

そう言っていると、彼女はニッコリと笑って手を振ってくれた。

僕は言葉を探したが、見つからず、ただ『今日はありがとござい
ました。』と言うのが精一杯だった。

そして、心の中で、やっぱり出逢うべくして出逢ったのかな？そう
呟いた。

第五話 ♪ 秘密の場所

僕は、その夜なかなか寝付けなかった。純恋さんの事を考えると、胸のあたりがキューッと締め付けられる思いがして、今この時間彼女は何をしているのдар？

なんて考えたり・・・。

そして、もう一つ想いを巡らせることは、今年のXmas eveの事だ。

Eveを二人でつて・・・、世間じゃEveを二人で過ごすつて事は・・・。

そんな事を考えていたら余計に眠れなくなつてしまった。

それでも、いつの間にかに眠つていたらしい。気がつく窓の外は、薄っすらと空が白み始めていた。

ベッドから起きだして携帯で時間を確認すると、着信があつた事に気づいた。着歴7時48分、今から1時間ほど前、着信相手は純恋さんだつた。

『純恋』という文字を見た瞬間、僕の胸の鼓動は跳ね上がった。

そして、迷わず電話をかけた。

「もしもし。」と電話に出た純恋さんの声は、いつもの響き渡るソプラノより少し低めだつやけど、耳に心地よくひろがった。

「さっき電話くれましたよね。ごめんなさい気がつかなくて。」

「う、うん。あのさ、涼くん。」

「はい、どうしました？」

「あのね、えーっと、今日の授業は？」

「今日は、12月6日の金曜日だから・・・、えっと、2限と3限と4限ですけど、」

4限の国際経済論が休講だから3限で終わりですけど。」

「そう！？、私も今日は2限だけなの、涼くん・・・、そのあと予

定ある？」

「いえ、予定はないですけど。」

「じゃ、少しお話できないかな？」

「いいですよ。じゃ、2時半に3限が終わるから、3時に図書館でいいですか？」

「了解、3時に図書館ね。ありがとう。」

「いいえこちらこそ、電話頂けて嬉しかったです。じゃ、3時に」
そう言って電話を切った。

話ってなんだろう？そう思いながらも、今日も純恋さんに会えるなんて夢心地だった。

こんな幸せな気持ちで朝を迎えられるなんて、今日はなんて素晴らしい日なのだろうと、この素晴らしい朝に感謝した。

やっと3限が終わった。今日の講義は今までで一番長く感じた。

そして、図書館へと向かおうとしながらも考えることは、純恋さんの事ばかりで、今日の講義の内容なんか全く覚えていない。年が明けたらすぐに、試験があるというのに……。でも、話があるってなんだろう？

図書館にはすでに純恋さんが待っていた。

この間の席に座り窓の外を眺めていた。まるでこの間と同じような哀しそうな瞳だった。

それを見た瞬間、僕は彼女を抱きしめたい、そんな思いに駆られてしまった。

でも、そんな事が出来るはずもなく、僕は彼女に声をかけた。

すると純恋さんは、「あつ、涼くん。早かったね」と振り向きながら僕に微笑んだ。

僕はその笑顔を見た瞬間、彼女を愛おしく想う気持ちが溢れ出し、彼女を抱きしめたいという気持ちがぶり返してしまった。

僕はその気持ちを必死に堪え、「お待たせしました。俺、うっかり

して図書館で待ち合わせなんて言っちゃったけど、ここじゃお話できませんよね。どうします？これから」

「そうねえ……。静かな所でお話しがしたいんだけど、どこがいかしら」

「静かな所ですか……。いいとこありますよ。」

「えっ、どこどこ？」

「いいから、行きましょう。」

僕たち二人は図書館を出て3号館と2号館の間を通り抜けその場所を目指した。

さすがにこの間のように手を繋いでと言うわけにはいかなかったけれど、心は躍った。

「やっぱりな」

僕の思った通り、そこには人もまばらと言うか僕たち以外には一人しかいなかった。

その場所は、4号館のラウンジのテラス席と言うか、芝生の上にガーデンテーブルが並んでいるちょっとした空間だった。この季節、しかも午後3時を過ぎてそこでお茶してる人などそうはいないと思っただった。

「どうですか？ここでいいですか？ちよつと寒いかな？」

「素敵」

「でしょ。秘密ですよ」

「うふふ」秘密？ほんとに素敵な秘密ね。」

「こんな素敵な場所がキャンパス内にあったなんて、4年生になるとあまり学校に来なくなるもんだから、気づかなかったわ」

「最近出来たばかりなんですよ。僕もこの間見つけたんです。」

「あつ、コーヒーでいい？ご馳走するわ」

「えっ、はい。」

「じゃ、ちよつと待っててね」

と言って純恋さんはラウンジ方に小走りで駆けて行った。

第六話 ♪ 記念日

純恋さんはトレイを両手で持ち、にっこり笑って帰ってきた。

僕にはコーヒーを、そして純恋さんは今日もミルクティーだった。

「はい、どうぞ」そう言っただけで僕の前にコーヒーを、そして自分の前にミルクティーの入ったカップを置いてから座り、しばらくティーカップに視線を落とし、考え込んだ素振りの後「ねえ、涼くん」と小さな声で僕の名前を呟いた。

「はい」そう答えると、「こんなことを涼くんに話すべきかどうか悩んだんだけどね、あなたには話しておかなきゃって思ってた……なぜだかそう思ってた……」

そう言っていると、カップを口に運び、一呼吸おいてから話を続けた。

「この間の男の人覚えてる？私の彼氏だったって人。」

「は、はい。覚えてます。」

「その人がね、昨日の夜に電話してきてさ、もう一度やり直さないと、俺が悪かったって、だから許してくれって、そう言ってきたのよ。」

僕は困惑した。純恋さんが、どうしてそんな事を僕に話そうと思ったのかが分からなかったし、どう答えれば良いのかも分からなかった。そして黙っている僕に向かって彼女は、

「ごめんね、こんな事を急に言われてもどう答えていいのか困っちゃうよね。私、どうかしてるわ。ホントにごめん。わすれて……わすれて？もう今さら忘れられないよ。なぜ？なぜ今日僕を誘ったんだろう？」

「あの、純恋さん、その事を、その彼との事を話す為に今日僕を誘ったんですか？」

「ごめんなさい。あなたに話す事じゃないことくらいわかってたんだけど……でも、話しておきたかったの。なぜだか、あなたの

考えを聞きたかったの。ホントにごめんなさい。」そう言いながら、彼女の瞳は、涙で満たされ今にも溢れそうだった。

その瞳を見た時、僕は、さっきまでわからなかった事が、今はつきりとわかった気がした。正確に言うと、僕の中で僕の気持ちがやっと理解できたのだった。

「純恋さんは、その彼のもとに戻る気はあるんですか？僕の意見を聞くまでもなく答えは出てるんじゃないですか？」

きつと純恋さんも、僕と同じ想いなのだと……。そう思えた。

純恋さんは、「えっ」と声にもならないくらいで答えた。

「ほんとだね、あなたに言っただけだったの。行くなつて……。だから、だから……。」

そう言うと、純恋さんの瞳からは大粒の涙が溢れだした。

「純恋さん、今年のXmas Eveは、僕がおめでとぅって言いますから、僕が、Happy Birthdayって言いますから……。僕じゃ、僕じゃダメですか？」

「うっうん。うっうん。ありがとう……。ありがとう。」そう言いながら、既に決壊していた瞳からは涙が止めどなく頬を零れ落ちていた。

僕は、そんな彼女の右手の上に左手を重ねていた。無意識のうちに。

それから僕たちは、お互いの気持ちを確認し合った。僕は、あの図書館での一目惚れを紅白し、純恋さんは、そんな僕の気持ちに気づき、貴方の優しさが、温かな心が、私の心にスーッと入ってきて、惹かれて行つたと……。気づいた時には貴方の事を好きになつていたと……。お互いの今の気持ちを告白した。

この日から僕たちの付き合いが始まったのだった。

そして、この日12月6日が、僕たちの最初の記念日になった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5327x/>

Lovers ～運命の二人～

2011年10月26日13時58分発行